

「確かな学力の育成に係る実践的調査研究」における
「学力定着に課題を抱える学校の重点的・包括的支援に関する調査研究（小・中学校）」
平成25年度委託事業完了報告書【総括】

都道府県名	秋田県	番号	5
-------	-----	----	---

推進地区名	推進校名	児童生徒数
にかほ市	金浦小学校	212
大仙市	西仙北中学校	207
羽後町	三輪小学校	164

○調査研究の内容

1. 推進地域における取組

(1) 推進地域の課題

①全国学力・学習状況調査等の結果から

平成24年度全国学力・学習状況調査の結果は、小学校は全ての教科で全国平均正答率を5%以上、中学校は4%以上上回った。しかし、活用に関する問題において、思考力や表現力等に関する記述式問題を中心に正答率が低い傾向があり、県独自の学習状況調査においても、同様の課題が見られた。

【全国学力・学習状況調査における各教科の課題】

- ・国語「条件に合わせて文章を引用しながら自分の考えを書くこと」
- ・算数・数学「必要な情報を用いて判断し、その理由を記述すること」
- ・理科「観察・実験の結果を基に考察すること」

【県学習状況調査における課題】

- ・全国学力・学習状況調査で課題が見られた中学校の数学、理科に加え、国語、社会でも思考力・表現力等に関する問題に課題
- ・中学校における生徒質問紙「教科が好き」という割合の減少

②小・中連携

本県では、小学校から中学校にかけて学力が順調に向上しない地区が見られる。これは、小学校の「学びのスタイル」が、中学校で十分生かされていない結果と考えられる。一方、小学校の教員のより高い授業づくりのために、各教科で習得した知識及び技能が中学校の学習でどのようにつながるかを知ることや、教科の専門性を生かした教科指導など中学校の教育力を活用することが必要である。これらを踏まえ、小・中連携を一層深めて授業改善を図り、学習意欲や思考力・表現力等の育成につなげる必要がある。

(2) 推進地域の学力向上の推進計画

①平成25年度の重点課題

本県の学力向上における課題を受けて、取組の重点を次の2点とした。

○「活用」に関わる学力の定着

○校種・学年・教科を超えた共同研究体制による小・中連携の充実

②秋田県検証改善委員会が提唱している「5つのエッセンス」の成果の検証

秋田県検証改善委員会では、全国学力・学習状況調査のデータを基に、「安定した成果を示している学校」「課題の改善が顕著である学校」の特徴を分析し、学力を支える関連因子をまとめた「一人一人の学力を伸ばすあきたの学校 ～5つの

エッセンス～」を県内の市町村教育委員会及び小・中学校に提唱してきた。本事業の調査研究では、重点課題への取組と同時に、推進地区及び推進校においては、5つのエッセンスから推進地区及び推進校が抱える課題の解決につながる視点を選択し、具体的な取組を通して課題の改善状況とその成果について検証することとした。

「一人一人の学力を伸ばすあきたの学校 ～5つのエッセンス～」

- 1：全国学力・学習状況調査や秋田県学習状況調査等の結果を踏まえた、学校体制でのP D C Aサイクルの確立
- 2：児童生徒が積極的に授業に参加できる学校空間づくりの推進
- 3：児童生徒の思考を促し深める授業づくりの推進
- 4：自発的学習を生み出すきめ細かな指導の充実
- 5：豊かな教育力を生む学校・家庭・地域の連携の充実

(3) 推進地区・推進校に対しての指導・助言

① 県教育庁教育事務所の指導主事による指導・助言

推進地区及び推進校の授業研究会等に県教育事務所の指導主事を複数回派遣し、本調査研究の進捗状況を把握するとともに、県の重点課題への取組や5つのエッセンスを活用した研究推進等について指導・助言を行った。

【県教育庁指導主事の派遣期日及び教科名】

金浦小学校	西仙北中学校	三輪小学校
6/27 国語・算数	9/20 保健体育	10/ 1 総合的な学習の時間
9/27 国語・算数	11/ 8 数学	10/30 算数
11/15 国語・算数	11/14 国語・数学・美術	11/20 音楽
	1/21 総合的な学習の時間	

② 教育専門監の活用

研究教科の教育専門監がない推進地区の推進校に対し、推進地区外から当該教科の教育専門監を派遣し、授業実践や研究協議を行った。

派遣した推進校	教育専門監氏名	教科	派遣回数
三輪小学校	小松尚子（横手市立栄小学校）	国語	3回
	倉田一広（湯沢市立稲川中学校）	算数	2回

③ 学力向上推進協議会（秋田県検証改善委員会）における指導・助言

各推進校に、学力向上推進協議会（秋田県検証改善委員会）から、全国学力・学習状況調査の分析結果について情報提供をし、推進地区及び推進校の取組について指導、助言を行った。

2. 推進地区における取組

(1) 各推進地区が「5つのエッセンス」から選択した内容 ※（ ）内はエッセンスの番号

○にかほ市（1・3・5） ○大仙市（1・3） ○羽後町（3・5）

(2) 各推進地区の取組

① にかほ市教育委員会

1) 校種、学年、教科を超えた共同研究体制による小・中連携の充実

- ・小・中共同による学習の心得等を作成した。
- ・推進地区運営委員会が中心となって小・中教員、市教委が参加する授業研究会及び授業を見合う会を実施した。

2) 児童生徒の思考を促し、深める授業づくりの推進（エッセンス3）

- ・推進地区において共通実践事項を設定し実践した。
- ・T T及び少人数指導の充実に努めた。（教育専門監や市独自の教育指導員の配置）

3) 学力調査の分析結果やあきた型学校評価システムを活用した学校体制でのP D C Aサイクルの確立（エッセンス1）

- ・推進地区運営委員会で学力調査の結果等を分析し、成果と課題について協議

を行い授業改善に結び付けた。

4) 地域・家庭との連携・協力（エッセンス 5）

- ・国や県の動向等について各校への情報提供を行った。
- ・保護者との連携による家庭学習を推進するよう各校への指導を行った。

②大仙市教育委員会

1) 小・中連携事業の継続

- ・西仙北小学校を協力校に指定して、小・中連携による学力向上を支援した。

2) 児童生徒の思考を促し深める授業づくりの推進（エッセンス 3）

- ・学び合いによる思考力の育成を目指し、国語、算数・数学、図画工作・美術の公開研究会を実施した。

3) 市独自の学力向上推進委員会の設置（エッセンス 1）

- ・学習状況調査の分析結果から課題の改善の方策を立案し、課題の改善状況を確認するためのフォローアップシートを作成して、各小・中学校の授業改善を促す取組を推進した。

③羽後町教育委員会

1) 小・中連携の推進

- ・町内の教職員で教育振興協議会を組織し、学力調査の採点、結果分析を実施するなど、共同研究体制の充実を図った。
- ・各中学校区ごとに学習習慣や生活習慣等の定着を図るため情報交換や具体的な実践事項の策定を行った。

2) 分かる授業・魅力ある授業による学力向上と教師の力量の向上（エッセンス 3）

- ・小・中連携の推進校の視察や教育専門監の授業参観等を通じた教師の指導力向上のための取組を行った。

3) 家庭学習の手引き等の見直しと家庭への協力依頼（エッセンス 5）

- ・推進校の中学校区で「学習習慣表」や「家庭学習の手引き」「生活習慣表」を作成し、家庭に配付して学校・家庭で連携した取組を行った。

3. 推進校における取組

(1) 各推進校が「5つのエッセンス」から選択した内容 ※（ ）内はエッセンスの番号

○金浦小学校（1・3・5） ○西仙北中学校（1） ○三輪小学校（1・3・5）

(2) 各推進校の取組

①にかほ市立金浦小学校

1) 小・中連携による授業改善

- ・小・中学校の授業改善に向けて、共通実践事項を策定し、特に授業における「見通し」「振り返り」の充実に取り組んだ。
- ・基本的な学習習慣・学習規律づくりのために、中学校で作成していた「学習の心得九か条」の小学校版を作成した。

2) 児童の思考を深める授業づくり（エッセンス 3）

- ・授業モデルの基本となる「目指す授業のイメージ」を作成し、単元や1単位時間の計画の立て方について教師間で共通理解を図った。
- ・ペア学習やグループ学習を意図的に取り入れ、根拠を明らかにして自分の考えを説明するなどの学び合いの充実を図った。
- ・児童の思考過程が見えるノートづくりの研究を進めた。

3) 各学力調査等の調査結果を活用したPDCAサイクルの確立（エッセンス 1）

- ・調査結果から児童の課題を見極め、朝学習や放課後等の補充指導による学力定着の取組を重点的に行った。
- ・校内研修会や授業研究会を活用して研究の進捗状況を確認し、明らかになった課題の具体的な改善策を立てるなど、短いスパンでPDCAサイクルにより課題改善に努めた。

4) 地域、家庭との連携による学力向上の取組（エッセンス 5）

- ・家庭学習の手引きを作成し、児童と保護者が見通しをもって取り組めるよう

支援した。

- ・地域の図書館と連携し、調べ学習等で使用する図書資料の充実を図った。
- ・読み聞かせボランティアを活用して児童の読書習慣の育成に取り組んだ。

②大仙市立西仙北中学校

1)小・中学校の全職員で組織する連携協議会の立ち上げと共同研究の実施

小・中学校の全職員を四つに分けて研究を行った。

合同研修会（4月）→各校の取組→合同研修（10月）→各校の取組→まとめ

【各班の今年度の研究内容】

授業研究班	学び合いの追究、授業における「書くこと」について、「めあて」と「まとめ」の整合性、課題設定など
表現力育成班	各教科における言語活動の充実と表現力の育成、基本話型、読解力との関連、話す場の設定など
家庭学習班	家庭学習の手引きの作成、内容の指導（教科・学年）など
キャリア教育班	9年間のキャリア教育の全体計画、キャリア発達に関わる活動計画の整備、キャリア意識の醸成など

2)学校体制でのPDCAサイクルの確立（エッセンス1）

- ・各種学力調査の結果データを活用して課題を把握し、すぐに課題解決に向けた取組を実施するなど、短いスパンでのPDCAサイクルを確立して生徒の学力定着に努めた。
- ・意識調査（生徒・保護者・教員）を、年2回実施してその結果を授業改善に活用するとともに、学校報やHP等で保護者に情報提供した。

③羽後町立三輪小学校

1)PDCAサイクルの活用による効果的な授業改善（エッセンス1）

- ・全国学力・学習状況調査の結果を分析し、国語科、算数科における自校の課題を解決するための重点単元を設定して研究授業に取り組み、課題の改善に努めた。
- ・自校における授業の1単位時間の流れを「学びのスタイル」として示し、教師が共通理解を図って実践を行った。併せて「学びのスタイル」に沿ったノート指導方法についても策定した。（エッセンス3）

2)小・中連携による共同研究体制の確立（エッセンス5）

- ・小・中の教員を「学習指導部」「家庭学習指導部」「生徒指導部」に分け、9年間を通して活用できる「学習習慣表」「家庭学習の手引き」「生活習慣表」を作成し、家庭にも周知を図り協力を求めた。

○調査研究の成果

1. 推進校における取組の成果

(1) にかほ市立金浦小学校

- ①小・中連携により、学習を支える基本的な学習習慣や学習規律づくりの方策について共通理解が図られ、9年間にわたる一貫した指導が可能になった。
- ②「学び合い」を授業に位置付け、「見通しー学び合いー振り返り」という授業スタイルを確立して、学力向上に取り組んだ。研究の窓口教科としての国語、算数において調査結果の向上が見られた。
- ③小・中連携の授業改善の取組により、児童の学習意欲の向上や保護者の学校評価等の数値に向上が見られた。

(2) 大仙市西仙北中学校

- ①小・中の全職員による共同研究の実施により、9年間のスパンでの研究が可能になった。
- ②ねらいに迫るための「学び合い」を効果的に取り入れることにより、生徒の中に学び合いの有効性が実感され、生徒の学習意欲の向上につながった。
- ③学力調査の結果を活用したPDCAサイクルを確立することにより、課題解決に向けた学び直しが効果的に行われた。

(3) 羽後町立三輪小学校

- ①重点教科を決めて、課題解決に向けた具体的な取組を行うことにより、県の学習状況調査において改善が図られた。重点教科への取組が、他教科における学力向上につながり、成果を上げている。
- ②「学習習慣表」「家庭学習の手引き」「生活習慣表」の作成など、小・中連携の具体的な取組を通して、共同研究体制が確立されつつある。
- ③研究推進により授業改善が進み、授業改善に対する生徒や保護者の評価が高くなった。

2. 調査研究全体の成果

(1) 推進地域の取組の成果

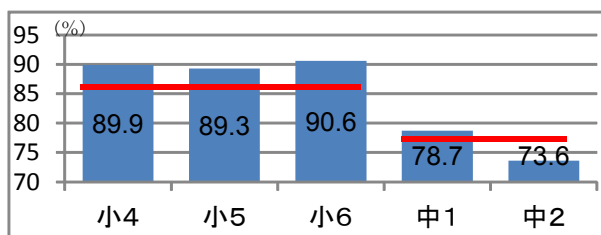
各推進地区及び推進校が、5つのエッセンスと関連した研究主題を設定して調査研究を行い、授業改善や共同研究体制の充実等において成果を上げた。推進地区及び推進校が選択したエッセンスについては実証的な検証を行うことができた。

①「5つのエッセンス」の1について

全国学力・学習状況調査と県学習状況調査を、推進地区や推進校が検証改善サイクルの中に位置付け、それらの結果を比較・分析することにより、児童生徒の学習意欲や学習習慣、学力等の育成の取組について、その成果と課題を明確に把握することができた。

<県学習状況調査と全国学力・学習状況調査の児童生徒質問紙の比較>

【県学習状況調査の児童生徒質問紙：学校の勉強がよく分かる】



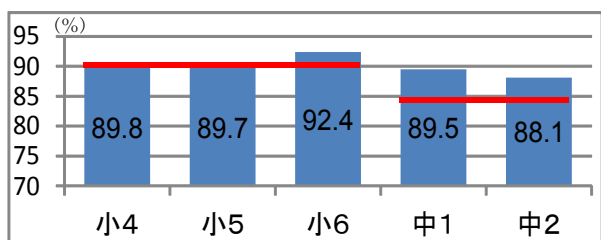
「よく分かる」「だいたい分かる」と回答している小6児童の割合は、全国学力・学習状況調査の調査結果(県の平均86.5)よりもポイントが高くなっている。※(中3は未実施)

※横棒は全国学力・学習状況調査の小6、中3の県の平均値(よく分かる・だいたい分かる)

②「5つのエッセンス」の3について

児童生徒が共に思考を深める場として「学び合い」の場を意図的に設定して重点的に取り組んだ推進校では、思考力や表現力等を育む授業改善が進み、児童生徒の学習意欲と「活用」に関わる力の向上が見られた。県学習状況調査の児童生徒質問紙「ふだんの授業では、学級の友達と話し合う活動をよく行っている」の結果においても全国学力・学習状況調査結果の結果よりも数値が向上しており、各小中学校においては、共通理解の基、推進されていることが見て取れる。

【県学習状況調査の児童生徒質問紙：ふだんの授業では、学級の友達と話し合う活動をよく行っている】



「当てはまる」「だいたい当てはまる」と回答している小6児童の割合は、全国学力・学習状況調査の調査結果(県の平均89.8)よりも高くなっている。中学校においても県の平均(84.2)を数値を大きく上回っている。※(中3は未実施)

※横棒は全国学力・学習状況調査の小6、中3の県の平均値(当てはまる・だいたい当てはまる)

③「5つのエッセンス」の5について

各推進地区の教育委員会がイニシアチブを取り、推進校と協力校による小・中連携及び家庭や地域との連携を支援したことにより、小・中合同の研究推進チー

ムによる研究授業の実施や、9年間を見通した学習習慣や生活習慣の系統表の作成など、多様な連携の在り方について研究を深めることができた。

(2) 本調査研究についての総括的評価

- ・課題のある学校が、学力定着に向けた具体的な取組を行うことで、確実に課題解決につながる実証ができた。本県においては、5つのエッセンスを基軸にして、推進地区及び推進校が研究を進めたことにより、改善のための取組や検証結果がより焦点化されたものになった。
- ・本県の推進地区と推進校では、効果的に連携を図ることによって、それぞれの推進地区と推進校で抱える課題について改善が図られた。また、今後取り組むべき課題や方向性も明確になった。このことから、本調査における推進地区と推進校の連携の在り方を、本県の学力向上における一つのモデルとして他地区に波及させていきたい。

3. 取組の成果の普及

(1) 成果発表会等での研究成果の報告

- ・秋田県教育研究発表会での発表
〈秋田県教育研究発表会（金浦小学校・西仙北中学校参加）〉
期日 平成26年2月6日（木）・7日（金）
- ・各教育事務所主催の成果発表会
〈第2回授業力向上推進協議会（中央教育事務所管内：金浦小学校参加）〉
期日 平成26年1月17日（金）

(2) 実践事例集の作成及びインターネットによる情報提供

「確かな学力の育成に係る実践的調査研究 実践事例集」を作成し、各学校・各市町村に配付し、活用を促した。また、県のHPで配信した。

○今後の課題

1. 本調査で未選択のエッセンスの検証については、成果を上げている他校の実践例などを取り上げる手段を講じるなどして、今後も5つのエッセンスを総合的に検証していく必要がある。
2. 平成25年度の全国学力・学習状況調査や県の学習状況調査においても「活用」に関する問題について課題が見られた。本年度の推進校の実践や「平成24年度確かな学力の育成に係る実践的調査研究 実践事例集」、秋田県検証改善委員会による「学校改善支援プラン（H19～H24）」などから、成果を上げた実践事例等を取り上げ、学校訪問指導や学力向上に係る事業等を通じて紹介するなどして支援していきたい。
3. 小・中連携の在り方については、各地区の実態に応じて更に検討していく必要がある。小・中の授業交流にとどまらず、共同研究を進めるための組織の在り方や共同研究テーマの設定など、推進地区の先進的な実践等を広く紹介し、各校の改善につなげていく必要がある。

「確かな学力の育成に係る実践的調査研究」における
「学力定着に課題を抱える学校の重点的・包括的支援に関する調査研究（小・中学校）」
平成25年度委託事業完了報告書
【推進地区】

都道府県名	秋田県	番号	5
-------	-----	----	---

推進地区名	大仙市
-------	-----

○ 推進地区として実施した取組の内容

1. 重点課題

- (1) 校種，学年，教科を超えた共同研究体制による小・中連携の充実
- (2) 児童生徒の思考を促し深める授業づくりの推進
- (3) 全国学力・学習状況調査や秋田県学習状況調査等の結果を踏まえた，学校体制でのPDCAサイクルの確立

2. 重点課題への取組状況

(1) 小・中連携事業の継続

西仙北小・中学校は，昨年度「新学習指導要領の趣旨を踏まえた学力向上等の方策に関する調査研究」指定校として研究に取り組み，算数・数学における「にしせんスタンダード（2つのステップの集団思考を取り入れた学習スタイル）」の構築及び組織で取り組む小・中連携「にしせんプロジェクト」等で成果をあげている。今年度は，西仙北中学校が単独で本研究の指定を受けたが，同地区の西仙北小学校についても市教育委員会が委嘱し，昨年度からの研究を更に継続して進める体制を整えた。

(2) 公開研究会の実施

昨年度両校が算数・数学の授業づくりとして取り組んだ「にしせんスタンダード」を，今年度は更に他教科にも広げる試みを行った。その成果の発信と評価を得る機会として，市教育委員会の主催で，「学び合いによる確かな学力の育成」をテーマにした国語，算数・数学，図画工作・美術の授業研究会を実施した。全国から約160名の教職員等の参加があり，本市の教職員にとっても貴重な情報交換の場となった。



公開研究会 西仙北中学校数学の授業の様子

(3) 本市における学力向上の取組

本市では，学習の定着状況の把握・分析及び学力向上施策等を検討するために，5教科の教職員による学力向上推進委員会を設置している。全国学力・学習状況調査，県学習状況調査，高校入試を活用した秋田県の検証改善サイクルを参考にしながら，調査結果の分析から捉えた課題の改善の方策及び課題の改善状況を確認するためのフォローアップシートを作成し，各小・中学校に提供することで，授業改善を促す取組を進めている。

また，一昨年度は国語科と外国語活動・英語科，昨年度は数学科と理科で実施した市教育委員会主催の教科研修会を，今年度は社会科において実施した。新学習指導要領の趣旨の理解や小・中学校の学習指導の円滑な接続をねらいとした研修の場となっている。

平成25年度 大仙市教育委員会学力向上の取組

- 4月 <全国学力・学習状況調査>
■第1回教職員研究集会
- 5月 ■第1回学力向上推進委員会
- 7月 ■全国学力・学習状況調査フォローアップシート [A問題]
■新学習指導要領に対応した授業改善を促す
フォローアップシート (社会, 理科, 英語)
- 8月 ■第2回教職員研究集会及び教科研修会 (社会)
<全国学力・学習状況調査結果公表>
- 11月 ■全国学力・学習状況調査フォローアップシート [B問題]
- 12月 <秋田県学習状況調査>
- 2月 ■学習状況調査フォローアップシート (5教科)
- 3月 <高校入試>
■教育研究所報「けやき」配布

次年度



(4) 広報活動の取組

①大仙市教職員研究集会の開催

本市では、教育研究所が主催して年2回の教職員研究集会を開催している。平成25年4月には、昨年度「新学習指導要領の趣旨を踏まえた学力向上等の方策に関する調査研究」の指定を受けた西仙北小・中学校がその取組の内容と研究成果の発表を行った。平成26年4月には、本事業に取り組んだ西仙北中学校の発表を行う予定である。



大仙市教職員研究集会での成果発表

②イントラネットによる広報活動

本市の教職員が公用パソコンで閲覧できるイントラネット (通称DEネット) に、学力向上推進委員会が作成した学力調査等の結果と分析, 改善に向けての提案やフォローアップシート等をアップしている。過年度の資料もそろえており, 教職員が必要な資料を手軽に取り出せるようになっている。また, 市指定の教育課程事業の報告資料等もアップし, その取組や成果の広報を行っている。



大仙市教職員ネットワーク (DEネット)

③教育研究所報「けやき」の発行

年度末に発行している市教育研究所報には, 推進校である西仙北小・中学校の取組の他, 文部科学省の指定事業や市教育委員会の事業, 各小・中学校区で取り組んでいる特色ある取組等を掲載して市内の全教職員に配布し, 周知を図っている。



教育研究所報「けやき」の一部

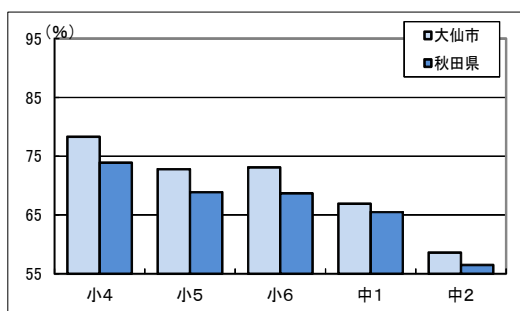
3. 調査研究成果の把握・検証

(1) 秋田県学習状況調査における成果

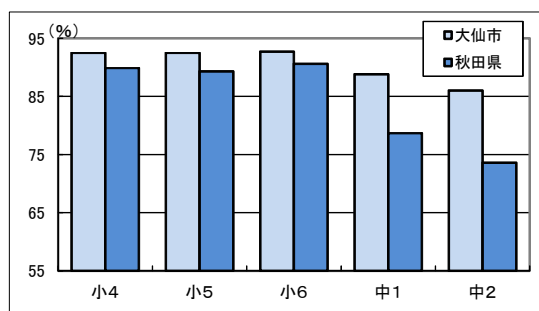
秋田県では、毎年12月に小学校4～6年生が国語、社会、算数、理科の4教科（ただし4年生は社会を除く）、中学校1・2年生が国語、社会、数学、理科、英語の5教科の学習状況調査を悉皆で行っている。同時に、生徒質問紙による学習意欲等のアンケートも実施しており、この調査結果を基に本調査研究の成果を把握することとした。

平成25年12月に実施された県学習状況調査における各学年教科別平均通過率は、実施された全ての学年で県の平均を上回ることができた。（資料1）さらに、教科別に見ても中学校1年生の数学を除いた全教科で、県の平均を上回ることができた。

また、児童生徒質問紙における「学校の勉強がよく分かる」に「つよくそう思う」及び「そう思う」と答えた児童生徒の割合も、県の平均を上回っている。これらは、学力向上推進委員会や教育研究所が中心となって、国や県の学習状況調査を検証改善サイクルに位置付けるとともに、本事業の取組内容を市内全体で共有できるようにしてきた成果と捉えている。



資料1 秋田県学習状況調査における県と大仙市の学年毎の平均通過率の比較



資料2 生徒質問紙「学校の勉強がよくわかる」に「つよくそう思う」「そう思う」と答えた児童生徒の割合

(2) 公開研究会における参加者からの感想

県内外から参加した約160名の先生方から、次のような肯定的な感想をいただき、小・中学校が連携して児童生徒の思考を促し深める授業づくりが推進された成果と捉えている。

- ・小・中学校が本当に連携していると感じた。小学校の学び方を続けると、中学校ではこうなるのかと実際に知ることができた。
- ・児童生徒同士、先生同士、先生と児童生徒の温かいつながりが随所に見られ、児童生徒が伸びやかに生き生きと活動している。
- ・小学校の学習の成果が、中学校でも生かされていることも分かり、小・中連携において何に取り組むべきなのかを示していただいた。

4. 今後の課題

秋田県の学習状況調査結果における本市の結果を見ると、例年中学校1年生において平均通過率が低い状況にある。また、小・中連携においては、中学校区によって取組に差が生じている実情も浮き彫りになってきている。

これらのことから、本市においては、小・中学校の学習指導における円滑な接続を更に推進していくことが課題である。本事業で得られた成果を市全体に広げることができるよう市教育委員会が一層のリーダーシップを発揮して取り組んでいきたい。

「確かな学力の育成に係る実践的調査研究」における
「学力定着に課題を抱える学校の重点的・包括的支援に関する調査研究（小・中学校）」
平成25年度委託事業完了報告書
【推進校】

都道府縣市名	秋田県	番号	5
--------	-----	----	---

推進校名	秋田県大仙市立西仙北中学校
------	---------------

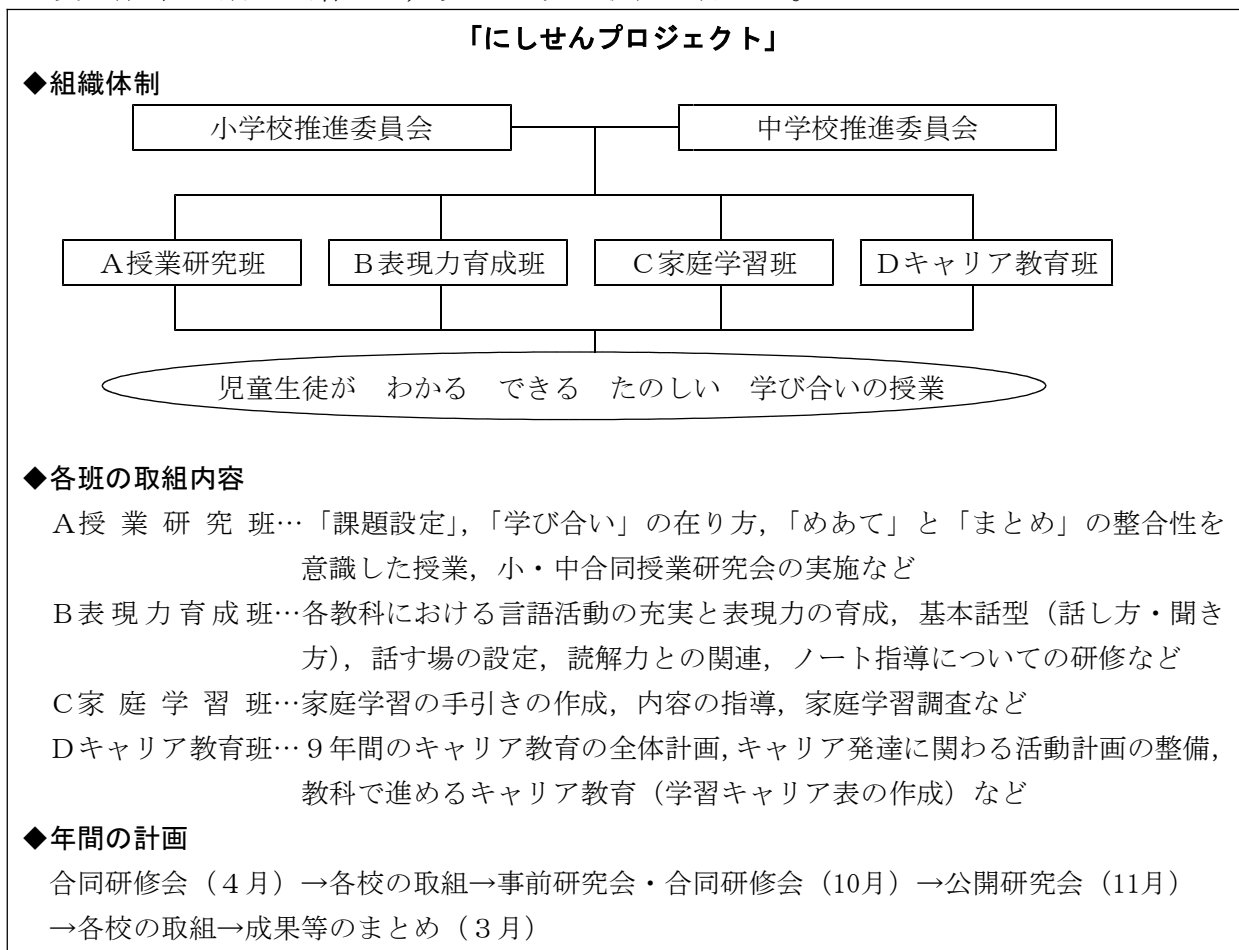
○推進校として実施した研究内容

1. 重点課題

- (1) 校種，学年，教科を超えた共同研究体制による小・中連携の充実
- (2) 全国学力・学習状況調査や秋田県学習状況調査等の結果を踏まえた，学校体制でのPDCAサイクルの確立

2. 重点課題への取組状況

- (1) 小・中連携研究協議会「にしせんプロジェクト」における共同研究
昨年度、学区内にある西仙北小学校と共に小・中学校の全職員で組織する連携協議会「にしせんプロジェクト」を立ち上げて共同研究を実施した。今年度は、昨年度の成果と課題を踏まえ，次のような取組を行った。



(2) 小・中連携による公開研究会の実施

2年間の「にしせんプロジェクト」の成果の発信及び評価を得る機会として、「学び合いによる確かな学力の育成～小中連携と授業デザインの工夫～」を研究テーマに掲げて公開研究会を実施した。公開研究会では、国語、算数・数学、図画工作・美術の3教科の授業において次の3点を視点とした授業を提示した。



公開研究会における3年数学の授業

①ねらいにせまるための2段階の学び合いを取り入れた授業

②「めあて」と「まとめ」を意識した授業

③「学び合い」に耐えうる課題提示と「学び合い」を促す作業活動の設定

(3) 学校体制でのPDCAサイクル

①客観的なデータを活用した学び直しと基礎・基本の定着

- ・全国学力・学習状況調査の分析→課題解決に向けた取組
- ・秋田県学習状況調査結果の分析→課題解決に向けた取組

②意識調査（生徒・保護者・教員）の実施と広報活動

- ・年2回の教師アンケート・生徒アンケート・保護者による評価の実施と分析
- ・学校報・HP等による取組状況の継続的な発信

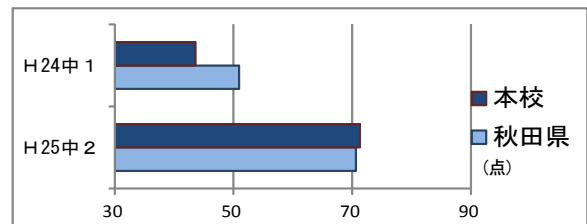
3. 調査研究の成果の把握・検証

(1) 秋田県学習状況調査結果から

①言語事項の定着

本校で課題としていた言語事項について昨年度及び今年度の秋田県学習状況調査国語における言語事項に関わる設問の平均を県の平均と比較した結果は、昨年度の1年生は-7.3だったのに対し、今年度の2年生は+0.7となった。(資料1)

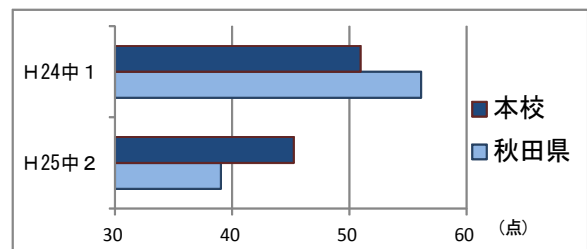
(資料1) 言語事項の設問の平均点



②数学的な思考力・表現力の向上

①と同様に数学における数学的な考え方に関わる設問について比較した結果、昨年度の本校の1年生は、県平均に対し-5.2だったのに対し、今年度の2年生は+6.2と大幅な改善が見られた。(資料2)

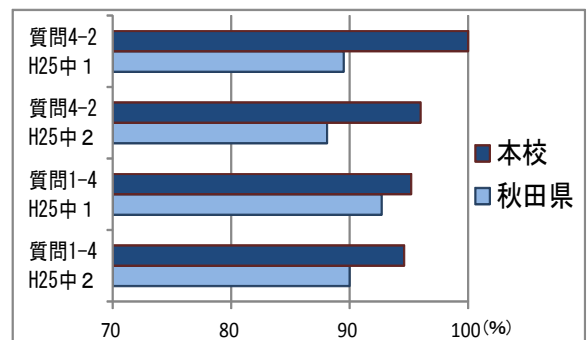
(資料2) 数学的な考え方の設問の平均点



③学習意欲の向上

今年度の秋田県学習状況調査の生徒質問紙において特徴的な傾向が見られたものとして、質問事項4-2「普段の授業では、学校の友達との間で話し合う活動をよく行っていると思う」と回答した生徒が全県に比べてかなり多く、特に1年生は100%であった。また、1-4「ふだんの生活や社会に出て役立つよう、勉強したい」と回答した生徒も県平均を上回っており、学び合いによる学習スタイルが学習意欲向上につながったと捉えている。(資料3)

(資料3) 生徒質問紙において「つよく思う、そう思う」と回答した割合



(2) 「にしせんプロジェクト」における成果

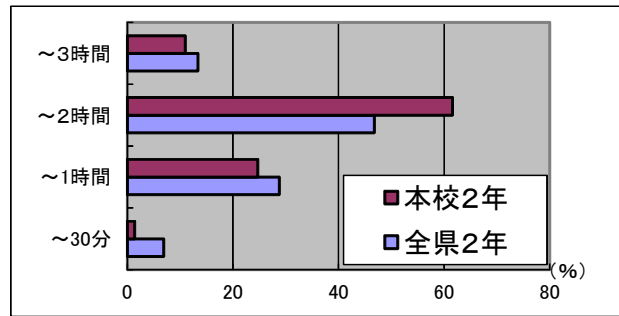
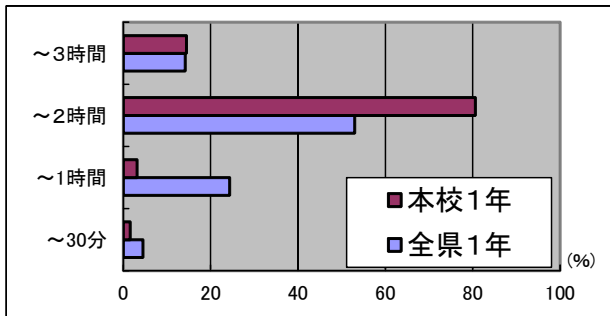
①授業研究班・表現力育成班

約160名が参加した公開研究会では、参会者から次のような感想が寄せられた。

- ・「学び合い」では、視点の与え方や集約の仕方、教師の支援など参考になることが多かった。(国語)
- ・子どもたちに「学び方」がしっかり育っているからこそ、その上に思考力・判断力・表現力が育っている。(算数・数学)
- ・「つなぎタイム1→つなぎタイム2」「学び合い1→学び合い2」と、学び方のデザインを決めることによって、授業の構成を考えやすくなり、分かりやすい授業が行えると思った。(図画工作・美術)
- ・授業の中で小・中連携が見える形で行われている。小・中が「本当に」連携していると感じた。(全体を通して)

②家庭学習班

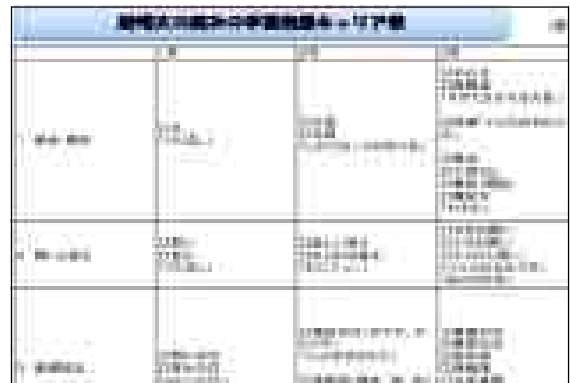
秋田県学習状況調査の生徒質問紙の質問事項3-1「学校がある日の勉強時間」の結果は、次のとおりである。県平均と比べて2時間前後勉強する生徒の比率が高くなっている。本校で決めている「1年80分、2年90分、3年100分」という学習時間のめやすを超えて取り組んでいる生徒が多くなっている。



学校がある日の勉強時間 県平均との比較

③キャリア教育班

小・中学校の体験活動や教科学習をキャリア発達の視点で見直すことによって、児童生徒理解を深めることにつながった。国語科では説明的文章における9年間を見通した読みの学習キャリア表を作成し、授業に生かすことができた。



4. 今後の課題

(1) 小・中連携「にしせんプロジェクト」の継続

「学び合いを深める工夫」「振り返りの充実」等の授業の連携はもちろん、あいさつ運動やクリーンアップなど、授業以外の活動の連携も含め、更に推進していく。

(2) P D C Aサイクルの継続・子どもの変容を見取るアンケートの実施

目指す生徒像に対して、教師アンケート・生徒アンケートの結果を比較して、授業改善につなげる。

(3) 校内授業研究会の充実

一人一研究授業を基本として、教科や学年の枠を超え、生徒の変容で授業を語るスタイルを継続するとともに、更に有効な手立てを探る。

「確かな学力の育成に係る実践的調査研究」における
「学力定着に課題を抱える学校の重点的・包括的支援に関する調査研究（小・中学校）」
平成 25 年度委託事業完了報告書
【推進地区】

都道府県名	秋田県	番号	5
-------	-----	----	---

推進地区名	羽後町
-------	-----

○ 推進地区として実施した取組の内容

1. 重点課題

- (1) 小・中連携による学習習慣の確立及び基礎学力の定着
- (2) 分かる授業・魅力ある授業による学力の向上と教師の力量の向上
- (3) 学校・地域との連携の充実により開かれた学校づくり

2. 重点課題への取組状況

(1) 実施体制

町内の小・中学校に勤務する教職員で羽後町教育振興協議会(以下羽教振)を組織している。教育委員会では羽教振と連携を図りながら特別委員会を設置し、全国学力・学習状況調査の採点や結果の分析、改善の手立てを示すとともに、各中学校ブロックごとに学習習慣や生活習慣等の定着を図るため情報交換や具体的な実践事項を確認し、小・中連携教育を推進してきた。

推進校の三輪小学校では、隣接する三輪中学校を協力校とし、「三輪中ブロック研修会」により学校・教科を超えた共同研究体制を推進できるよう、教育委員会として支援した。

(2) 小・中連携教育の推進

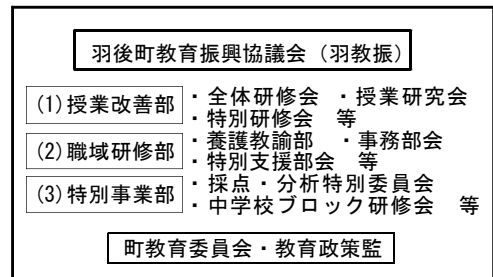
- ①羽教振全体研修会での教育講演会の開催。秋田大学教育文化学部 阿部昇教授による講話。「小・中連携教育による授業改善及び共同研究体制～言語活動の充実～」
- ②羽教振夏季研修会「三輪中ブロック研修会」の開催。教育政策監による講話と支援。「小・中連携教育の充実～育てたい力・指導観の共有、家庭学習の手引き～」
- ③先進校視察。小・中連携による学力向上について先進的な取組をしている潟上市立天王小学校、天王中学校で教育専門監の授業を参観し、小・中連携の取組について説明を受ける。

(3) 成果の普及等

教育専門監及び大学教授から継続的に指導を受けてきた国語科の授業研究会を開催し、町内の小・中学校教員に授業を公開した。

教育委員会では、校長会等において、三輪中学校の教員による三輪小学校の指導

羽後町教育振興協議会



案検討会への参加やTTとしての授業支援，研究協議会への参加など，校種を超えた共同研究に取り組み，小・中一貫性のある指導により成果を上げていることを周知した。

3. 調査研究の成果の把握・検証

(1) 学力調査等に見られる成果

県学習状況調査の結果を県平均と比較したところ，重点教科の国語や算数・数学で通過率や好きな割合が，前学年より向上していることが分かる。例えば，算数は，県平均と比較して前学年（小4）では+3.2であったが，H24年度（小5）では+6.7と向上している。（グラフ1）

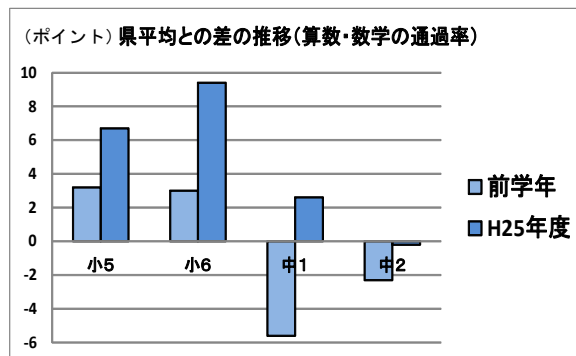
また，課題となっていた家庭学習の平均時間においても，今年度が前年度より多くなっている。（グラフ2）

三輪小学校での授業改善への取組や9年間を見通した段階表の作成など，小・中連携教育の推進により，学年間及び校種間の円滑な接続が図られ学力向上に結び付いている。

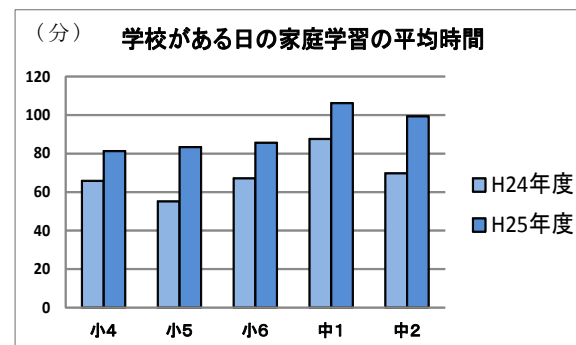
(2) 教育政策監の学校訪問による成果の把握

校内研修会や県教委の指導主事訪問等に教育政策監も参加し，授業参観や研究協議会を通して成果の把握に努めた。

グラフ1 県平均との差の推移（算数・数学）



グラフ2 学校がある日の家庭学習の時間



4. 今後の課題

本町の小・中学校は，複式学級や単学級，教科担当が一人しかいない学校など小規模校が多い現状にある。このような教育環境の中で授業改善を推進し学力向上を図るためには，秋田大学・阿部昇教授の講話にあったように，「実質化された授業研究（研修）システム」の確立が必要と考える。

三輪小学校では，全教職員がチームで取り組むことはもちろんのこと，小・中連携の推進等により成果を上げている。今後，教育委員会として小・小連携や中・高連携，教育委員会と学校との連携など，校種や教科等を超えた共同研究が維持・向上できるよう支援を強化したい。

「確かな学力の育成に係る実践的調査研究」における
「学力定着に課題を抱える学校の重点的・包括的支援に関する調査研究（小・中学校）」
平成25年度委託事業完了報告書
【推進校】

都道府県名	秋田県	番号	5
-------	-----	----	---

推進校名	秋田県羽後町立三輪小学校
------	--------------

○ 推進校として実施した研究内容

1. 重点課題

- (1) PDCAサイクルを確立し、主体的な学びを創るための授業改善を行う。
 - ・教師の授業力向上のために研修の充実を図る。
 - ・基礎的、基本的な知識・技能の習得と、それらを活用して課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力の育成のために授業改善を行う。
- (2) 小・中連携による学力向上のための共同研究体制を効果的に機能させ、地域、家庭との連携のもと学力の向上に努める。
 - ・学びのスキルの定着や学習習慣の徹底を図る。
 - ・理想の自分に向かって努力する態度を養い、学習意欲を向上させる。

2. 重点課題への取組状況

(1) PDCAサイクルの確立と授業改善

①重点単元の設定と授業研究体制の見直し

本校の課題の分析から、国語科では「読むこと」「話すこと・聞くこと」領域の改善、算数科では「思考力」の育成を目指すこととした。国語科の3年「すがたをかえる大豆」、6年「学級討論会をしよう」、算数科の5年「単位量あたりの大きさ」を重点単元として校内授業研究会を実施し、他学年でも関連する内容・単元に重点的に取り組んだ。授業研究は、事前検討や具体的な授業の準備・細案検討、研究協議の役割分担等を上学年部・下学年部として実施した。特に、指導案の事前検討は次のように大きく3段階とした。



6年国語「学級討論会をしよう」授業風景

- ・4～3週間前…どのような力を育てるためにどのように実施していくか、構想の話合い
- ・2週間前………1回目の話合いを基に書いた指導案を具体的に検討
- ・授業実施まで…授業の詳細の検討、教材準備

さらに、研究協議は二つの視点を定めるとともに付箋紙法を用いたグループ協議を取り入れ、視点に沿った話合いやそのまとめを積み重ねてきた。結果として、授業研究に主体的に取り組む機会が増え、研究の方向性や共通実践事項を実践の中で確かめることができ、全体的な授業力の向上につながった。

②算数科「三輪小学びのスタイル」の共有

資料1のような『算数はかせ』になろう！や自分の考えを説明するときの「話し方・使いたい言葉」を全学級の教室前面に掲示し、1単位時間を基本的にこの流れで実施するようにした。また、この学びのスタイルに沿ったノート指導の基本を示し、共通実践してきた。

(2) 基礎学力向上の取組

①パワーアップタイムの計画的実施

朝8時15分からの15分間を利用し、火曜日「計算」、木曜日「読解」の問題を、校内放送を利用して全校一斉に実施した。基礎学力向上を目指し、最初の5分間は、大事なところに線を引きながら読みを深める活動を行った。

また、月曜日の放課後には学級担任以外の教職員での個別指導を重視したパワーアップタイムを実施してきた。

資料1 算数科「三輪小学びのスタイル」



②読書活動の推進

学年推薦図書(各学年20冊)を示し、がんばりードを作成した。5校時前に読書タイムを設定し、学年相当の物語を集中して読む時間とした。

(3)小・中連携による共同研究体制の確立

①9年間を見通した段階表の作成と配付

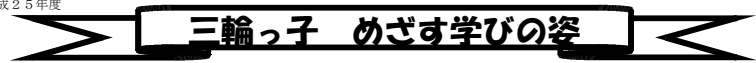
小・中の教員が「学習指導部」「家庭学習指導」「生徒指導部」に分かれ、それぞれで連携して取り組むことを話し合った。特に「9年間を見通して」ということでは、資料2のような「学習習慣表」「家庭学習の手引き」「生活習慣表」を作成し、家庭にも周知を図り協力を求めた。

②教師間・児童生徒間交流

教師間交流は「気軽に合うところから」ということで、週に2・3名ずつ普段の授業を参観する期間をもった。その際、率直な感想を伝え合ったり、中学校の教師から小学生に中学校の学習との関連等について話をしてもらったりした。

資料2 小・中で連携して作成した「学習習慣表」(一部抜粋)

平成25年度



三輪小・中学校 学習指導部会 (一部抜粋)

	小1・2年	小3・4年	小5・6年、中1年	中2・3年
家での準備	<input type="checkbox"/> うちのひとといっしょに、じかんわりをしらべ、べんきょうどうぐをよいういする。 <input type="checkbox"/> うちのひとにたしかめてもらって、しゅくだいやせんせいにだすものを、きめられたひまでにだす。	<input type="checkbox"/> 時間割や通信などをもとに自分で持ち物を準備する。 <input type="checkbox"/> 通信などをもとに、宿題や提出するものを期限までに忘れずに提出する。	<input type="checkbox"/> 時間割やメモ等をもとに、必要な学習用具を準備する。 <input type="checkbox"/> 宿題や提出物は、期限を守って提出する。	<input type="checkbox"/> 見通しをもって、計画的に家庭学習に取り組む。

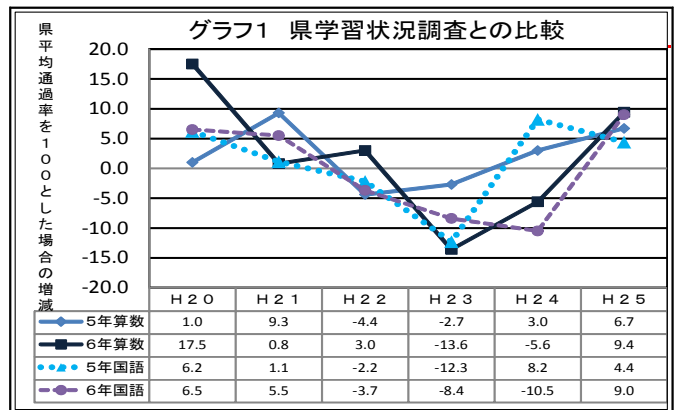
また、校内授業

研究会では、その教科の中学校教師に指導案検討会から参加してもらった。重点単元の5年「単分量あたりの大きさ」では、中学校の数学教師がT3として指導に当たった。さらに、秋田大学の阿部昇教授や秋田県で配置している教育専門監の指導もいただきながら、国語科の授業公開を行った。児童生徒間交流としては、地域クリーンアップを小・中合同の縦割りグループで実施した。

3. 調査研究の成果の把握・検証

(1) 県学習状況調査の平均通過率を上回った

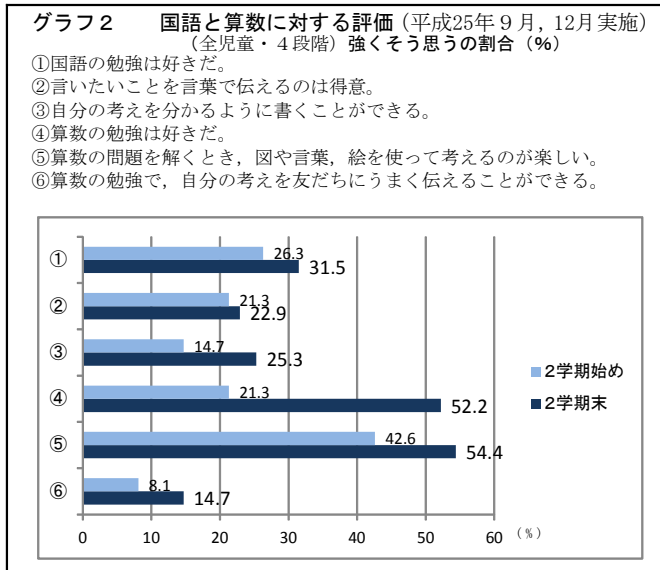
重点教科である国語・算数について、5・6年生の通過率と県平均通過率と6年間にわたり比較した。昨年度から少しずつ改善し始め、今年度は、5・6年生のいずれの教科においても県平均通過率を上回ることができた。(グラフ1)



(2) 自校の課題に係る子どもたちの学習

に対する意欲や力が高まった

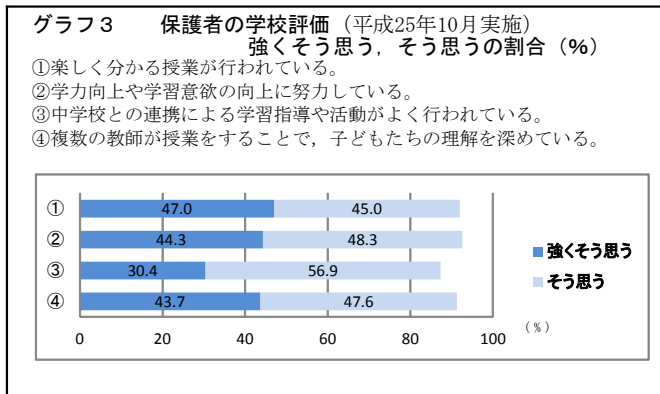
全校的に国語に対する意欲の低さが課題だったが、「国語が好き」という子どもが大きく増加した。グラフにある「強く思う」(31.5%)とグラフにはない「そう思う」(47.5%)を合わせると79%となった。また、自分の考えを表現することへの意欲や自信の高まりも表れている。算数についても、学習意欲の向上とともに、思考力を伴う学習に積極的に参加しているという結果が数字に表れていると考えられる。(グラフ2)



(3) 昨年よりも保護者の評価が高まった

学校評価の中で本研究に関わる項目では、いずれの項目も90%ほどが肯定的評価をしており、「楽しく分かる授業」が行われているという高い評価を得ることができたと受け止めている。

日々の学習活動や家庭学習に取り組む子どもの姿、PTAや学校報等での情報提供から、保護者の学校教育への理解が進んでいると考えられる。(グラフ3)



(4) 教師の授業改善が進み、子どもの高まりを実感している

本校の教員からは、「下位の子どものやる気や基礎学力が高まった。」「上位の子どもは自分の考えを伝える力が高まった。」「話したり書いたりするとき、構成を工夫したり、引用や要約を用いたりすることができるようになってきた。」「文章の大事な部分やキーワードを見付ける力が高まった。」という声が出された。

4. 今後の課題

- (1) グラフ2の②及び③の項目に係る言語活動の充実は、本校において今後も継続して取り組まなければならない課題と考える。特に、題意をしっかりと読み取って必要な情報を取り出したり、根拠や解釈を示しながら説明したり書いたりする力を段階的に高めることで、表現力等を一層育てていく。
- (2) 算数科に対する学習意欲は高まっているが、グラフ2の⑥「算数の勉強で、自分の考えを友だちにうまく伝えることができる」についてまだ十分とはいえない。そこで、算数科においては、今年度作成した「三輪小学びのスタイル」を基本型として、低・中・高学年の発達の段階に応じた指導方法を再検討し、授業改善を一層進めていく。
- (3) 小・中連携による共同研究体制は、新しく始めたばかりで十分に成果を実感できるレベルには至っていない。そこで、9年間を見通した学習習慣の定着や学力向上のための具体的な指導方法について、全教職員が小・中学校の校種や教科の枠を超えた研究を一層推進していく。また、家庭学習の質的な向上を図るため、今年度作成した「学習習慣表」「家庭学習の手引」等の活用や改善を進めていく。

「確かな学力の育成に係る実践的調査研究」における
「学力定着に課題を抱える学校の重点的・包括的支援に関する調査研究（小・中学校）」
平成 25 年度委託事業完了報告書
【推進地区】

都道府県名	秋田県	番号	5
-------	-----	----	---

推進地区名	にかほ市
-------	------

○ 推進地区として実施した研究内容

1. 重点課題

- (1) 校種，学年，教科を越えた共同研究体制による小・中連携の充実
- (2) 児童生徒の思考を促し，深める授業づくりの推進
- (3) 全国学力・学習状況調査や秋田県学習状況調査等の結果を踏まえた，学校体制での P D C A サイクルの確立
- (4) 地域，家庭との連携・協力

2. 重点課題への取組状況

- (1) 校種，学年，教科を超えた共同研究体制による小・中連携の充実

①小・中学校の共通実践事項に関する計画・実践と評価

- ・児童生徒に基本的な学習習慣が身に付くように，小・中学校が協力して「浜っ子の学び」（金浦小学校），「学習の心得九ヶ条」（金浦中学校）を作成し，継続的な指導に取り組んだ。また，学校訪問の機会を捉え，適宜，指導を行った。

②授業研究会等の共有化の推進

- ・推進地区運営委員会が中心となって，小・中学校教員，教育委員会が参加する授業研究会を実施したり，授業を見合う会を設定したりして児童生徒の情報交換を積極的に行い，よりよい指導方法について協議した。
- ・平成 25 年 11 月，金浦小学校を会場に，にかほ市内外の小学校教員や金浦中学校の全教員の参加を得て，公開研究会を実施した。研究協議会では授業改善につながる意見がたくさん出され，研究推進に役立った。

③学力定着に関わる実践等の情報交換と相互支援

- ・教育委員会が小・中学校を積極的に訪問し，各校の効果的な実践を他方に紹介することで，互いの研究の活性化を図った。
- ・2月に県総合教育センターで開催された秋田県教育研究発表会において，推進校の取組を参加者に広く紹介した。研究の成果と課題について参加者と意見交換をすることができた。

- (2) 児童生徒の思考を促し，深める授業づくりの推進

①魅力ある学習課題設定と形成的評価の工夫

- ・基礎的・基本的な学習内容の確実な定着を目指した授業づくりについて指導を行った。児童生徒の実態や前年度までの指導上の課題を整理し，授業改善の視点を明確にするとともに，共通実践事項を設定し，推進地区全体で取り組んだ。
- ・1 単位時間あるいは 1 単位の中で付けたい力を明確にし，ねらいと評価の整合性を図った。特に，児童生徒の変容で成果を見取るよう指導した。

②学び合いによる思考の整理・深化と言語活動の充実

- ・課題解決的な学習の中で行う学び合いの位置付けや効果について協議し，指導することにより，授業のねらいに即した学び合いを展開することができた。

- ・授業のまとめの場面で、学び合ったことを整理するとともに、互いに伝え合う時間を確実に設定した。思考力を高める上で効果的であった。
- ③ T T 及び少人数学習による、児童生徒一人一人が生きる場の保障
- ・中学校に配置されている教育専門監及び市で独自に配置している教育指導員を活用し、小学校では第3学年以上の算数で少人数指導に取り組んだ。

第3学年	1学級	27名	学級担任，教務主任
第4学年	1学級	39名	学級担任，教頭，市教育指導員
第5学年	1学級	31名	学級担任，教務主任，市教育指導員
第6学年	2学級	45名	学級担任，教育専門監（金浦中学校教諭）

- ・中学校第1学年は、1学級が36名と人数が多いため、国語，社会，数学，理科，英語の5教科で少人数指導を行い，中1ギャップの解消に努めた。
- (3) 全国学力・学習状況調査や秋田県学習状況調査等の結果を踏まえた，学校体制での P D C A サイクルの確立
- ① 知識・技能の定着や活用する力を問う問題及び学習意欲に関わる評価と，指導へのフィードバック
- ・推進地区運営委員会で，全国学力・学習状況調査の結果を踏まえた指導方法の改善や，秋田県学習状況調査等の結果分析から見えてきた研究の成果と課題について協議した。
 - ・本市が実施している N R T の結果について，共同で分析を行い，陥没点に対する指導方法について協議した。
- ② あきた型学校評価システムを活用した学力定着に関わる P D C A サイクルの確立
- ・学校が設定した目標について，学校訪問の機会を捉えて進捗状況を確認するとともに，改善点について指導を行った。
- (4) 地域・家庭との連携・協力
- ① 学校便り，学年・学級通信などによる研究情報の発信と，保護者との相互理解
- ・地域や家庭との円滑な連携を図るために，国や県の動向等について学校側に必要な情報を提供した。
- ② 家庭学習や通知表等における，保護者との協力による学習意欲づくり
- ・諸調査の結果から家庭学習に対する児童生徒の意識を分析し，推進地区運営委員会や小・中連携推進委員会の場で取組に関する協議を行った。

3. 調査研究の成果の把握・検証

(1) 授業研究会等による検証

- ・授業研究会を積み重ねた結果，課題とまとめが一致した児童生徒主体の授業展開が着実に定着しつつある。このことは，秋田県学習状況調査質問紙の「授業中『はじめに目標』をもっている」，「『最後に振り返り』を行っている」割合からも読み取れる。（資料1）

【資料1 「目標」や「振り返り」の県との比較】

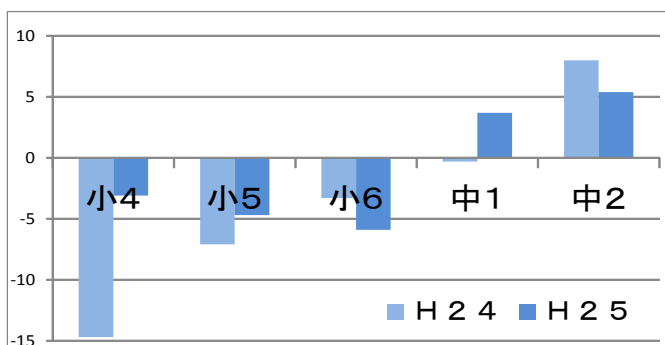
学年	はじめに目標(%)		最後に振り返り(%)	
	地区(県比)	県	地区(県比)	県
小4	97.5(+6.5)	91.0	94.8(+ 6.2)	88.6
小5	93.4(+3.2)	90.2	90.0(+ 3.2)	86.8
小6	95.4(+2.0)	93.4	88.3(- 1.4)	89.7
中1	96.9(+7.4)	89.5	100.0(+12.9)	87.1
中2	95.7(+6.8)	88.9	95.6(+12.9)	82.7

(2) 諸調査等による検証

- ・秋田県学習状況調査の国語、算数の結果について、昨年度は小学校の全ての学年でにかほ市の平均を下回っていたが、今年度は、小5、6年生の国語及び小4、5年生算数でにかほ市の平均を上回った。

【資料2 国語 県との経年比較】(ポイント)

- ・県平均との経年比較を行ったところ、差が大きく縮まっていることが分かった。例えば、昨年度の小6における国語の県平均との差が-3.3だったのに対して、今年度の中1における県平均との差は、+3.2と、昨年度と比較して6.5ポイント上昇した。(資料2)



(3) アンケートによる検証

- ・秋田県学習状況調査質問紙の「勉強が分かる」について経年比較を行ったところ、全学年で割合が高くなっていることが分かった。少人数指導によるきめ細かな指導や、小・中学校の一貫した取組の成果だと捉えている。この他、学校でも児童生徒や保護者を対象としたアンケートを実施し、成果と課題を検証している。(資料3)

【資料3 「勉強が分かる」経年比較】(%)

H24小4 → H25小5	75.6 → 100.0
H24小5 → H25小6	89.2 → 97.3
H24小6 → H25中1	61.7 → 84.4
H24中1 → H25中2	82.6 → 89.1

(4) 秋田県教育研究発表会での発表等に対する意見、感想の集約による検証

- ・「授業づくり」に対する意見を数多くいただいた。特に、「振り返り」の捉えについて今後も協議を重ね、改善を図っていく。

4. 今後の課題

(1) 自分の考えを整理し、表現する力の向上

- ・秋田県学習状況調査の結果を分析すると、自分の考えを整理し、適切な言葉で表現する問題の正答率がやや低い傾向にある。原因を分析し、次年度の課題としたい。思考力、判断力、表現力等の育成に資する言語活動の充実について再度指導していきたい。

(2) 共通実践の継続

- ・学習習慣や授業スタイル等、今年度、成果が見られた取組については、次年度も継続して確実に取り組んでいく。そのために、年度初めの小・中連携協議会で取組について共通理解を図るとともに、積極的な学校訪問により適切な指導を行っていききたい。
- ・小・中学校相互に行う授業参観の活性化を図るとともに、小・中学校教員による中学校1年生でのTTも検討していきたい。

「確かな学力の育成に係る実践的調査研究」における
「学力定着に課題を抱える学校の重点的・包括的支援に関する調査研究（小・中学校）」
平成25年度委託事業完了報告書
【推進校】

都道府県名	秋田県	番号	5
-------	-----	----	---

推進校名	秋田県にかほ市立金浦小学校
------	---------------

○ 推進校として実施した研究内容

1. 重点課題

- (1) 校種，学年，教科を超えた共同研究体制による小・中連携の充実
- (2) 児童の思考を促し，深める授業づくりの推進
- (3) 全国学力・学習状況調査や秋田県学習状況調査等の結果を踏まえた学校体制でのPDCAサイクルの確立
- (4) 地域，家庭との連携・協力

2. 重点課題への取組状況

- (1) 校種，学年，教科を超えた共同研究体制による小・中連携の充実

① 小・中学校の共通実践事項を踏まえた授業改善の推進

- ・ 研究協力校である金浦中学校との連携を生かし，小学校の元学級担任が中学校の授業研究会に参加したり，中学校教諭が小学校の授業研究会の指導案検討会に参加したりするなど，双方の授業研究会へ相互に訪問し，意見交流を行った。
- ・ 小・中での共通実践事項を中心に研修を深め，特に，「見通し」「振り返り」の在り方について，中学校の実践から多くのことを学んだ。

② 学習を支える基本的な学習習慣・学習規律づくり

- ・ 中学校で学習規律づくりの基本となっている「学習の心得九ヶ条」（資料1）に対応した項目を小学生向けに表した「浜っ子の学び」（資料2）を作成し，小・中学校相互の指導に一貫性をもたせ，指導の効果が上がるようにした。

資料1 学習の心得九ヶ条



資料2 浜っこの学び



③中学校教師や中学生ボランティアによる小学生への指導

- ・教育専門監（中学校教諭）との授業を6年生の算数科で集中的に実施した。児童が中学校での学習を想起することで、学習意欲の喚起や中1ギャップの解消に役立てるなど、専門性を生かした具体的な指導を行った。
- ・「中学生に学ぶ夏休み学習会」と題して、夏休み期間中に、5、6年生を対象とした先輩（中学校3年生のべ12名）との学習会を実施した。児童一人一人の弱点の克服を図り、教える側、教わる側双方の学習意欲を高められるようにした。参加した児童からは、「丁寧に教えてもらえて分かりやすかった。」等の声が多く聞かれた。（写真1）



写真1 中学生との学習会

(2) 児童の思考を促し、深める授業づくりの推進

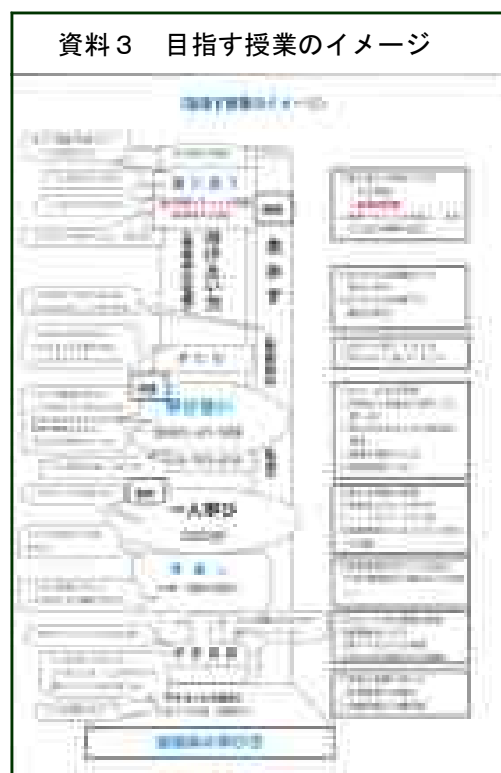
①互いに確かめ合い・高め合う「学び合い」の充実

- ・授業モデルの基本となる「目指す授業のイメージ」を作成し、それに沿って、児童の思考の流れやつまずきの予測、具体的な支援策などを児童の実態に基づいて考え、単元や1単位時間の計画を立てた。（資料3）
- ・「考えを深め合う」「互いの考えを確かめ合う」など、学習課題に応じて学び合いのねらいを明確にし、ペア学習、グループ学習といった形態を使い分けながら、根拠を明らかにして自分の考えを友達に分かりやすく説明する活動を中心に、各教科における学び合いの充実を図った。（写真2）



写真2 グループでの学び合い

資料3 目指す授業のイメージ



- ・考えや思考の過程が残るよう、ノートの使い方の例を示し、全校で統一した。児童はノートを見返して学びの履歴を探り、「見通し」や「振り返り」を行うことができた。（資料4）
- ・ノートづくりに対する児童の意識を高めるため、全校でノート展示会を行った。見本となるノートのスタイルを児童が参考にできるようにした。
- ・「見通し」「学び合い」「振り返り」の場をしっかりと見据えるとともに、児童

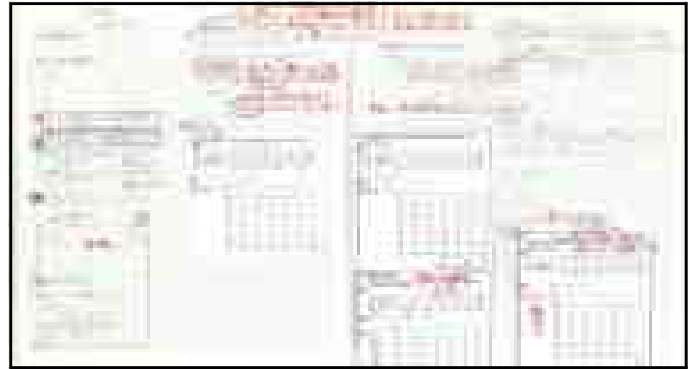
資料4 児童のノート



の思考や表現をイメージできるよう、教材研究の際に、教師も児童と同じ形式でノートを作成し、発問や留意事項を書き込んで指導を行い、授業の流れを確認できるようにした。(資料5)

これにより、授業の流れを大切にしようとする教師の意識が高まった。学び合いに必要な以上の時間をかけたり、時間が足りず振り返りが不十分になったりすることがほとんど見られなくなった。

資料5 教師のノート



②児童が安心して学べるTT，少人数指導の充実

- ・TTの時間割や担当者の配置を見直した。これまで算数科を中心に実施してきたTTを、国語や、図画工作等の実技教科を含む他教科に広げ、個に応じた指導の充実を図った。
- ・話し合いの場面では、2人の教師が役割分担を考え、ねらいに迫るために児童の思考を揺さぶる「発問」を行った。児童は「本当にこの考えでよいのか」「他にどんな考えができるのか」と自分の考えを見直し、確かめることができた。TTの活用により、自力解決の場面では児童の思考の様子を効率よく把握することができ、話し合いの場面、他者説明を行う場面で意図的指名を行うことで児童の思考が深まった。

③児童の実態を把握し、付きたい力を明確にした、「見通しと振り返り」（形成的評価）の工夫

- ・児童に学習の「見通し」をもたせる場面では、「結果の見通し」と「方法の見通し」の2通りの見通しをもたせた。また、前時までに学習したことを基に見通しがもてるように、教室の側面に算数コーナーと国語コーナーを設置した。
- ・以前は情意面に偏りがちだった振り返りの在り方を見直し、チェック問題や評価問題により児童一人一人が、自分の理解の度合いをしっかりと見取り、「分かった」「できた」という達成感をもつことができるようにした。



写真3 TTによる授業

(3) 全国学力・学習状況調査や秋田県学習状況調査等の結果を踏まえた学校体制でのPDCAサイクルの確立

①知識・技能の定着や活用する力を問う問題及び学習意欲に関わる評価と、指導へのフィードバック

- ・諸調査（NRT，全国学力・学習状況調査，秋田県学習状況調査，CRT等）の結果を分析し、全職員で共通理解するとともに、陥没点への重点指導を行った。
- ・朝の始業前の時間に「スキルアップタイム」（15分）を設定し、学級担任外の教師も各学年に入って、前年度の諸調査から明らかになった陥没点（前年度の学習内容）を中心に基礎学力の定着を図った。
- ・放課後等、授業時間外にもできる限り時間を設け、補充指導を行った。

②あきた型学校評価システムを活用した学力定着に関わるPDCAサイクルの確立

- ・学力向上に向けて明確な数値目標を設定するとともに、研修職員会議や授業研究会を通して、学校全体で抱える課題や共通実践事項について確認し、研究の進捗状況を把握しつつ、改善できる点については即時に対応できる体制をとった。

(4) 地域、家庭との連携・協力

①学校の教育方針・研究内容についての理解を深める広報活動の充実

- ・ P T A総会や学年懇談による情報提供の他、学校だより等の各種通信を通して保護者の啓発を図るとともに、学校の方針を伝え、継続的な家庭学習の取組など学習習慣の定着に向けた協力を呼びかけた。

②家庭と連携し、基礎的な学力と学習意欲を向上させる家庭学習の工夫

- ・ 「家庭学習の手引き」を作成して学年に応じた家庭学習の目安（内容・時間）を明確に示し、児童と保護者が見通しをもって家庭学習に取り組めるよう支援した。

③地域の図書館や読み聞かせボランティアと連携した読書活動の推進

- ・ 市の図書館や近隣の学校と連携して、国語の学習に関連する図書を揃え、並行読書の活動ができるようにしたり、折に触れて調べ学習に活用するなどして、児童が多くの図書に触れることができるようにした。
- ・ 市内のボランティアグループと連携し、月1回の「読み聞かせタイム」を実施することにより、児童の読書習慣の形成に取り組んだ。

3. 調査研究の成果の把握・検証

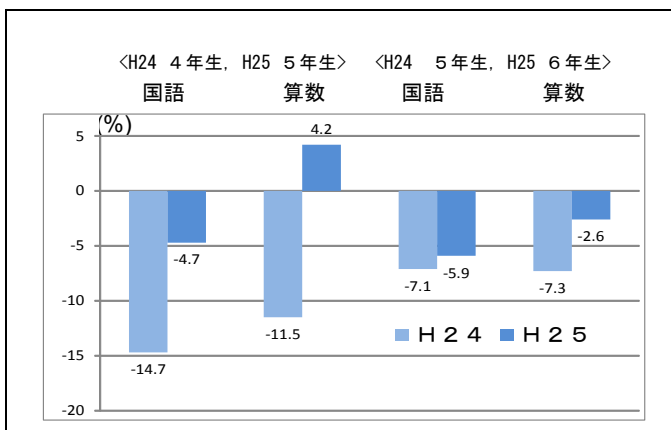
(1) 授業研究会等による検証（授業研究会、公開研究会、各種訪問等）

- ・ 年間6回の校内授業研究会や公開研究会において、指導主事や参会者からは「学び合いが効果的に位置付けられている」「『見通し→学び合い→振り返り』という学び方が身に付いている」「児童の学習意欲が向上してきている」などの点が評価された。
- ・ 「授業の流れが教師主体になりがちで、児童主体になっていない」という旨の指摘をいただいた。授業の流れがやや画一的で、児童の主体性を培うものになっていない面が明らかになった。
- ・ 各種訪問では「学習規律が身に付いており、落ち着いて学習できている」ことについて評価されたが、「学級により差が見られる」ことについての指摘をいただいた。

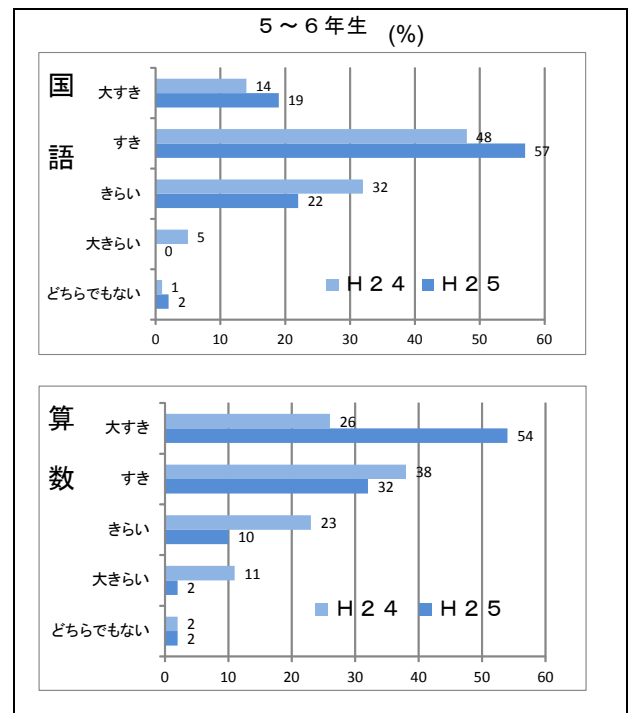
(2) 諸調査等による検証

- ・ 秋田県学習状況調査における5、6年生の平均通過率について、昨年度と今年度を比較すると、今年度、研究教科としている国語と算数に関して改善が見られた。（資料6）

資料6 県平均通過率との差



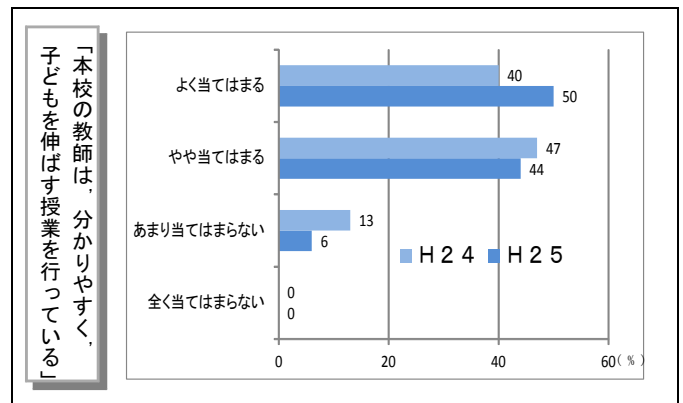
資料7 学習意欲の変化



- ・ 学習意欲に関しても、向上が見られた。秋田県学習状況調査の質問紙調査において昨年度の5年生と現在の6年生を比較したところ、国語や算数の学習が「好き」と答えた児童が増加し、「きらい」と答えた児童が減少した。（資料7）

- (3) アンケートによる検証
- 保護者アンケートでは、教師の指導力についての評価が向上した。「本校の教師は、分かりやすく子どもを伸ばす授業を行っている。」という質問項目について肯定的意見の割合が大きくなり、否定的意見の割合が小さくなった。(資料8)

資料8 保護者アンケートから



- (4) 秋田県教育研究発表会での発表等に対する意見、感想の集約による検証
- 秋田県教育研究発表会において本校の研究の概要を発表した。その際、参会者から、「見通しと振り返り」に関する様々な意見をいただいた。
 - 本校の実践における「見通しと振り返り」の捉えについて高く評価された。参会者から、関連する取組についての紹介が多数あり、「見通しと振り返り」の在り方について改めて考えるよい機会となった。

4. 今後の課題

(1) 学力定着について

- 研究教科とした国語と算数については、諸調査の結果を見ても、昨年度より向上している面が多く、取組の成果が上がっていることが考えられたが、社会や理科等、他教科については、成果をはっきりと認識することができなかった。
- 今後は、国語や算数における取組を基に、各教科に適した授業モデルを構築し、「見通し→学び合い→振り返り」の流れを各教科の特性に合わせたものに発展させていく必要がある。
- 特に、学び合いを中心とした言語活動の充実を図り、各教科における読解力を高める指導の工夫をしていきたい。
- 諸調査の結果から改善の状況を見取ることができるが、成績上位層の割合が少ない状況は改善していない。また、ノート作りや家庭学習の取組についても、児童が主体的に工夫を加え、質的な向上につなげられるよう支援する必要がある。

(2) 見通しのもたせ方について

- 児童に見通しをもたせることで学習に主体性が生まれ、学習意欲の向上にもつなげることができる。その反面、教師が見通しの場面を丁寧に扱いすぎることによって、ともすれば全体の考えや友だちの考えに安易に流されたり、思考の幅を狭めてしまったりする面があり、児童の主体的な学びにはつながらない。中学校での学習につながる主体的な学びを身に付けられるよう、中学校との連携を深めながら学年に応じた見通しのもたせ方を考えていく必要がある。
- 公開研究会等では「振り返りの中で、見通しが妥当だったかどうかの検証をする必要があるのではないか」という意見が出された。振り返りの在り方や、見通しと振り返りの関係について考えていく必要がある。

(3) 評価の在り方について

- 振り返りの場面で評価問題やチェック問題は、教師が児童一人一人の学習状況を把握し、その後の指導に生かしていくことはもちろんだが、児童自身が、次の学習に生かしていくための自己評価につながるものでなければならない。「自分は、何ができて何ができなかったのか」「これからどんなことをしたいのか」など、自分の学習を振り返ることで、興味や関心が持続したり、発展的な学習につながったりするような、評価の在り方を考えたい。